

和歌山県政のあり方を考えるシンポジウム

「和歌山の観光と観光行政の

これからを展望する—観光を考える視点」①

大阪観光大学学長 山田良治



山田良治氏

5月9日、和歌山市プラザホープで開催された、「和歌山県政のあり方を考えるシンポジウム」(主催・ゆたかで住みよい和歌山県をつくる会)での山田良治氏(大阪観光大学学長)の講演を2回にわたって紹介します。

ご紹介いただきました、大阪観光大学の山田と申します。3年前までは和歌山大学の教員を40年近くやっておりますので、和歌山とは様々な関りを持ってきました。

大阪観光大学といえば、理事長速捕ということが3年ほど前に、にぎやかに報道されました。その後、日大の方が有名になりました。私は和歌山大学を離れたからも研究を続けるため、熊取町に住んでいるから大阪観光大学の研究室を借りて研究をすることにしました。これから研究に集中できると思ったので、一、二ヶ月経ちましたら副学長をやってくれないかという話がありまして、当時の赤木学長さんには和歌山大学の時にずいぶんお世話になっていて断れずに、形でよければという返事をしたのです。ところが、

その一月後に理事会のクレーダーが起きました。その数ヶ月後には理事長速捕ということで、テレビドラマの半沢直樹、まるでああいう世界でした。それはそれで社会勉強になりましたが、自分が副学長として関わるとは夢にも思いません。肝心の研究をすっぱかして、大学の再生に微力を尽くすということになりました。

それが昨年の春頃に、理事会が乱立していたのを裁判所が執行停止を出してくれまして、裁判所の推薦した弁護士が理事長代行ということになりました。そこから再建の道を歩み始めています。直ぐに民事再生を申請して、まもなく民事再生からも脱出します。いよいよ自分の足で立つ、観光を冠した日本であつた一つの4年制大学です。「観光立国」と言っていますが、いろんな意味で発言や提言をしていく拠点として、進んでいこうと出発したところです。

一連の改革の中で重要な点の一つは教育改革でした。観光教育はいかにあるべきなのか、その事を考えていくと、前提として観光とはなにか、どう考えるかが問題になるわけです。それを設計する役割を私が担うことになりました。その基本的な考え方を昨年まとめたのが、今日、販売しています『観光を科学する』(晃洋書房)という本です。更に配っていただいた「大学憲章2022」です。この憲章「自由を共に楽しみ、社会を共に生きぬく」というスロガンを掲げています。これにはいろんな反応がありまして、これも4月から開始したばかりです。話の中でそのことの意味について、後ほど触れて行きたいと思います。

私はそもそも観光の専門家ではありませんでした。経済学部の教員で、もちろん観光は対象としてそれに含まれます。観光に正面から切り込んでいく立場に立った以上、科学的に観光を説明していく、単に業界に奉仕するとか、インバウンドを増やすと言ったことではなく、そうした観点でこの本を書きました。本を出した時に神戸大学名誉教授の二宮厚美さんから長文の感想をいただきました。その中に、自分は、大阪の維新政治と対決するということが使命だと考えているけれど、この本は維新のカジノ政策、観光政策に対する根本的な批判になるというように評価していただきました。皆様方の運動にも多少は貢献できるかと思えます。ただ、ハウツーを今日はお話する場ではないと思っていますので、その点をご了解いただければと思います。それではレジメに沿って話を進めさせていただきます。

その一月後に理事会のクレーダーが起きました。その数ヶ月後には理事長速捕ということで、テレビドラマの半沢直樹、まるでああいう世界でした。それはそれで社会勉強になりましたが、自分が副学長として関わるとは夢にも思いません。肝心の研究をすっぱかして、大学の再生に微力を尽くすということになりました。

目次

和歌山県政のあり方を考えるシンポジウム	
和歌山の観光と観光行政のこれからを展望する	
—観光を考える視点①	
大阪観光大学学長 山田 良治	1
中辺路町の合併を検証	
地域に目を向けた予算や対応を考えてほしい	5
お知らせ	8

わかやま住民と自治

発行/和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9 太田ビル203号
TEL・FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp 2022年6月号

視点Ⅰ なぜカジノはだめなのか 「依存症」批判の限界

和歌山は、幸い否決されたというのですが、まだ全国的には息の根は全然止まっています。カジノを批判する際に、依存症になるとか、投資効果はそれほど無いかという論点が普通かなと思います。じゃあ依存症に対する手を打てばカジノOKかという、そうではないでしょう。カジノに限らずいろいろな依存症があります。パチンコ、アルコールもそうです。こういうことは様々に起きるのです。依存症対策は大事なことです。それよりもっと大事なことがあると考えています。

すごく簡単に結論を言ってしまうと、お金をかけて、まあ一部の人は得をするのですが、大多数の人が損を被るわけです。これは根本的に人の不幸の上に立って、幸福はつかめるかという問題です。宮沢賢治が「世界全体が幸福にならな

いうちは、個人の幸福はありえない」と述べていますが、人の不幸の上に立って幸福を築くという事は、やっぱり本来的におかしいわけです。

例えばトランプや将棋も勝負事ですが、勝負事自体が悪いわけではない。あるいはスポーツでもそうです。ところが、例えばラグビーで勝負が終わった後は、ノーサイドで互いに、たたえ合うわけです。

カジノをやって儲かった人と損をした人が互いにたたえ合う事が、そもそもあるかという、ありえない話。つまり共感が無い。戦いは戦いとして、ゲームはゲームとして行うこと。それ自体は楽しいという事はあるとしても、その結果として共感を得るような形ではなくて、人の不幸の上に立脚をする。この事は、人間の生命活動にとつて、実は非常に本質的な問題です。

キーコンセプト1、

「類的存在」

「類的存在」。これは『経済学

哲学草稿』の中で、マルクスが多用している言葉で、人間の本质と

いうのは「類的存在」、つまり一人で生きてい

るわけではなく、他人・他者と共同をして

みんなと一緒に頑張っている。その中にこそ

人間的幸福がある。そういう存在が人間であ

「観光を科学する」

るということです。ここに抵触するような本質をカジノ等、博打・ギャンブルというのは持っていることこそ本質的な問題があります。皆で助け合っていく存在だということとは共に働くという協働の原理に通じるものであり、これを使用価値の原理としておきます。それに対して儲かるとか、損をすることかという競争の原理があり、これは交換価値原理に他なりません。この使用価値と交換価値というのは、商品が持つ二つの要素であり、経済学ではアダムスミスの古典派経済学が提出した基本的な概念です。使用価値というのは、そのものの有用性とか有用性を持ったものです。それを作り出すために協働するという原理は普遍的なものですが、資本主義社会の場合には常に合わせて交換価値の原理が作用します。つまり、お金の問題、儲けの問題というのが絡んで関わってくる。この二つの原理と関わってくるのが、いつもま

くいくのではなくて、しばしば大変矛盾をしてきます。

一つの例を上げると「万引き家族」を作った映画監督の是枝裕和さん、彼が映画会社の若手監督の卵を集めた研修の場で話したのですが、皆さんは将来映画監督としてやっていくと、必ずいい映画を作りたいという気持ちと、映画会社なりが言ってくる「それでは儲かりません」という圧力とが対立する衝突す

る局面に遭遇するでしょう。その時に自分が本当にいい映画、作りたい映画を作るといって、映画人であつてくださーいといった意味の話をしています。これなどはまさに二つの原理の対立です。交換価値原理はもちろん無視できません。しかし、交換価値というのは本来は使用価値を獲得する手段でしょう。しかし、この社会では手段と目的が転倒し、交換価値こそが目的化し、使用価値の実現はそのための手段に転落します。

例えば、大手電機メーカーS社の方は「我が社はいものを作っている。海外のS社は売れるものを作っている。いいものを作っていけば、必ずうまくやっ

ていける。」と言っていました。しかし、結果はS社は大きな経営難に至りました。大きな会社でも、そういう現実が存在する

ともあれ、この使用価値原理対交換価値原理、協働原理対競争の原理というのが常に作用して

いるのがこの社会であり、どちらからも逃げる事ができない

ことを前提に物事を考えることが必要というのが、この視点I

に関わる問題の提起です。このことの意味は、次の項目のところでもう少し具体的に考えてみたいと思います。

視点Ⅱ

そもそも観光とは何か

根本的な問題は、観光を労働との関係で考えることの決定的

な重要性です。観光の根本を理解する上では、労働とはそもそも何かというものを理解することがメダルの表裏みたいな関係があります。そこで、まず、観光とは何かということに話を進めましょう。

キーコンセプト2、 「非日常空間への移動を伴う自由な対目的合目的関係運動」

学生達はしばしばこの表現を聴くだけで頭が真っ白になるのですが、そんなにややこしい話を言っていないません。この要素を分解してみた場合。レジメの

①から④までの話につながっていきま

す。まず、①「合目的関係運動」という言い方なのですが、要するに目的性を持って

対象と関係する運動です。例えばハチは巣をつくる時、巣をつ

くる目的の意識を持ったり出来上がった巣を頭に描いているわけ

ではない。しかし、人間の都合、建物をつくる場合、頭の中に

に建物の設計があり、それに沿って様々な道具を用いながら一

つの建物を作っていく。全ての生産活動は、合目的関係運動

という側面を持っている。観光も普通は目的を持っています。

美味しいものを食べに行くとか、農業体験をするとか、さまざま

な目的をもって、その対象と関係を持っていきます。そういう

意味では他の動物にはないような人間の合目的関係運動とい

自由を共に楽しみ、社会を共に生きぬく

3つの基本理念	3つの社会的使命
<p>I (束縛から)自由へ</p> <p>観光は、自由な人間の生命活動としての余暇活動をリードします。その発展を、市民的人格形成の指標として捉え、観光の発展を通して束縛から解放された自由な社会の実現に寄与します。</p>	<p>I 楽しむ力と生きぬく力の養成</p> <p>大阪観光大学は、現代社会の人間形成上の諸課題を深く認識し、観光と人生を楽しむ力を備えた世界市民の発展を支援すると共に、現代を生きぬく力を備えた観光業・サービス事業等に携わる職業人を養成します。</p>
<p>II (孤立から)共生へ</p> <p>世界中で社会的分断・暴力的紛争が多発している中で、「観光は平和へのパスポート」という国連のメッセージを旨とし、孤立と対立のない平和な共生社会の実現に貢献する道を歩みます。</p>	<p>II 観光学の確立と発展</p> <p>大阪観光大学は、観光がグローバル化した現代を踏み解く新しい観光学を確立し、これに基づいて観光現象の過去・現在を解明し、自由で持続可能な共生社会実現への道筋を展望します。</p>
<p>III (浪費から)持続へ</p> <p>観光の発展が自然生態系や地域社会の循環に悪影響を及ぼす事態が現れています。環境に優しい健全な観光の発展を通して、持続可能な社会の実現を目指します。</p>	<p>III 地域・社会への貢献</p> <p>大阪観光大学は、地域・社会の方々の参画、観光事業等の実業界との連携を得て、地域に愛され世界に開かれた大学として、地域・社会への貢献を続けます。</p>



学校法人大阪観光大学
大阪観光大学
〒590-0493 大阪府泉南郡熊取町大久保南5-3-1
TEL: 072-453-8222
FAX: 072-453-1451
<https://www.tourism.ac.jp>

大阪観光大学大学憲章

食べたいというのは、即自的な欲求です。ところが社会の美意識では、太ると嫌われるという意識があった場合に、これは食わずに我慢しよう。自分の体形を維持しようという意識が同時に働きます。自分自身をコントロールして抑制、変革の対象として見ている。だから、即自的な欲求と対自的な欲求の両面を我々は持っている。この辺が人間の人間らしい一番の特質です。ちなみに赤ん坊は、生まれたては本当に即自的な存在です。お腹減ったといえれば泣くわけです。食べたら笑うかもしれないところが成長するにつけて、親子周りの人達との関係の中で、ここはちよつと食べるのを我慢しておかなければならないとか、いろんな事を、こうした方が周りの人から褒められるやり方だということを学んでいきます。つまり、即自的な側面を基礎に置きながら対自的な側面を発達させていきます。ついでに言えば高齢化していった場合です。赤ちゃん返りすると言いますが、赤ちゃんと戻っていく場合というのは、実は対自性が薄れる。お腹が減ったとか、腹が立つとかはそのまま対自的なコントロールなしに出てくる。もちろん人生の最後まで両方の側面をきっちり持ちながらの人もいますし、それぞれなのですが、高齢化問題というのは、そういう対自性の希薄化問題を認知症とも絡みながら含んでいると言えます。

この対自の意識は、さっきの類的存在であるということからきます。つまり、いろんな人と社会を作っているわけで、その社会の中で作られる常識とか意識を自分も持っているわけですから、その意識から自分自身の個人的な意識と対峙するということになります。哲学の世界ではこれを「自己意識の二重化」という言い方をします。例えば山田太郎であるとか花子といった名前を意識します。そういう風に他者と区別をして、自分自身をひとつの対象として認識をするというのは人間だけです。だから合目的関係運動であると同時に、それが対自的であること、自分自身を変革の対象にしているということが非常に重要です。

しかも③「自由」という意味は、自分がそうしたいと思いたい欲求に従って実現していくということ、これが実は何百万年も続いた人類の普遍的な生命活動です。腹が減ったからチームを組んで狩りに行かねばならぬいし、取ってきてそれを一族で分けて、みんなで分かち合うとかです。そういう形でもって、自由な対自的合目的関係運動というものをやってきている。労働というのは、まさにそういう風に人間にとっては人間自身であることの証しですし、本来は非常に幸福感と結びついたものです。実現できなければそれはストレスになります。それをみんなで克服して乗り越えていく。本来の労働の姿であると言えるのです。

ところが、資本主義社会の中で行われる労働というのは、そういう点だけでは説明できない。つまり組織の中に入って、経営者に管理されるようになると、自由な自発的意思に従って動いている労働とは変わってきます。嫌なことでもやらなければならないし、競争しながらやらねばならない。労働時間以外に行う様々な対自的合目的関係運動という余暇活動も実は、本来は労働と同じなのですが、労働は賃労働として人に管理され、支配されて行いが、余暇活動は自分の意思に基づいて行うという違いが出てきます。

資本主義以前には労働と余暇という区別が存在しませんでした。ところが資本主義になって賃労働によって例えば9時から5時まで働く、それが労働。それに対してアタリ5が余暇活動という区別がされて、資本主義社会の中ではそういう領域のみ、基本的に自分の意思に基づいてやりたいことができるということになります。

ツバイク(Zweig)という人の言葉ですが、その意味で「趣味はおそらく、彼の全人格を仕事以上に表現する。というのは、彼は必要のために働き、選択を通じて趣味に従事するかである」。趣味と言えは遊び

大阪観光大学

大学憲章2022
10の約束
教職員行動指針



う側面を持つているわけでは、一番ややこしいのは②「対自」という言葉です。これは哲学者のヘーゲルが使っていた言葉で、反対語は「即自」と言います。簡単に言うと自分自身を外側から捉えていく。つまり、人間の合目的関係運動というのは対象を何らかの形で変革していくわけですが、その対象が自分自身にも向く、即自的な自分と対自的な自分の両面を持っているとヘーゲルは議論しています。例えばお腹がすいて何か

という感覚があるかもしれませんが、例えば魚釣りに行くとか、イチゴ狩りに行くとか、そういう余暇活動においてこそ、彼の全人格を仕事以上に表現する可能性がある。なぜかという点と自分の意志に基づいているからです。仕事は意志に基づいてなくてもやらされてやることができる。ここが一つのポイントになります。

③というのは人間の生命活動の本質、睡眠とか自律神経に任せて生きている時間帯を除けば、人間は基本的に対目的・目的の関連運動を行っている。ここにおいては労働も余暇も、何も区別はない。本質は同じなのです。ところが、形態としては、賃労働と余暇活動という仕事対趣味という区別として現れる。

労働と言えば、賃労働を前提に考えてしまい、労働と余暇活動との本質的な同質性という観点から議論できている観光学、余暇学の本というのはほとんどありません。常識恐るべきということでしょうか。自分の経験の中から労働と言え、賃労働としてやっているかあるいは生きるために、儲けるためにやっているという感覚を前提にしているが、人類史的に見ればそんなことは言えないということに注意していただきたい。

次の問題は余暇活動の中でも観光というのがまた区別をされてくることです。皆さんが今ここに来て私の話を聞いているのも仕事としてお金を儲けているわけ

はないという限りでは余暇活動です。しかし観光に来ているわけでもない。観光というのは一体何かというと、④「非日常空間への移動」を伴っている。そういう意味で非日常空間への移動を伴う自由な対目的・目的の関連運動という場合が観光として意識される。これが観光の本質です。でも、こういう本質が全て観光と意識されるわけではありませぬ。ともあれ、観光の場合は、そういう非日常空間への移動が大きな役割を果たします。

ここで関わってくるのが、これも実は社会学の領域では、ごく議論されているモビリティの議論です。空間の役割は一体何なのかということ、最近ではそれもリアルな空間とバーチャルな空間、「メタバース」という言葉も出ていますが、頭の中の精神の世界で別の世界をもう一つ作って、その中で別の自分が動いているという話です。

現実の空間に話を戻しましょう。先ほど申し上げた自己意識の二重化というのが、実はある空間範囲の中でのその社会的持つ意識が自分の中にインプットされている事から生じるものです。そういう事から言うと、異なる空間に入っていくとどうなるかという、別の社会的意識の中に入り込みます。その空間の中に、それはその空間の形としても表現を例えば建物であるとか町並みだとかいろいろな形で

表現をされていますが、そういうところへ行くと、自分自身が普段所属をしている日常空間との違いということがはっきりと肌で感じてわかる。

自分は日本人であるという意識というのは、外国に行くことによつて初めて分かるということもそういうことです。綺麗な景色を見に行くのも観光なのですが、異なる社会的空間を体験することによつて色々な発見が出てきます。だから1970年代の「デイスカバー・ジャパン」はその意味で自己の再発見です。

②番目の対自性という要素、自己意識の二重化とも密接に絡んでいるのですが、日常空間と非日常空間との関係の仕方という視点も非常に重要です。しかし、どこでその二つを分けるかということには必ずしもはっきりしません。時間距離は、交通手段の発展でどうにも変わるわけです。ただ、いろんな空間、社会的空間は重層的な階層性を持っていきますし、和歌山県であるということ、例えば大阪府であるということはもちろん違いますが、今度は近畿と東北でもまた全然違います。更に言えば日本と例えば中国まったく変わるわけです。そういう様々な空間毎の空間、社会的空間の重層性ということが、観光にとつて非常に大きな意味を持っています。

もう一つのリアル対バーチ

ャルだということなのですが、これも、空間を共有することの意味というのが果たして、どこにあるのか、今皆さんと私はこの会議室の空間を共有しています。別の言い方をすれば同じ空気を吸っているのです、この空気が吸っているのをみんな肌で感じていきます。まあ、スポーツや音楽をライブで鑑賞するとかも同じような意味で、実はその中で様々なコミュニケーションが行われている。そういうものが社会的空間です。これを「共在」という言い方をすることがあります。

だから、最初に申し上げた類的存在で共同的存在だということとは、空間も共有した中で実現されている。かつてエンゲルスは「反デューリング論」の中で、空間と時間が存在の根本形式である指摘しました。時間は分かり易いのですが、バーチャルという状況が入ってくると、空間の意義はややくしくなります。今もズームで中継をしていただいているわけですが、オンラインで聞いていただいている方と、私たちは空間は共有していない。空間を超えてしまふのです。このことは一面で空気の共有ということに、限界を持ちます。しかし、一方では非常に遠隔の人でも、まるで横にいるかのように、話ができるというメリット、交通費がかからないというメリットもあります。それ自体は非常に進歩

的な役割を果たしてくる可能性を持つているのですが、それでも空間を共有することは、絶対的な存在の根本形式であることに変わりはありません。

例えば、富士山といういい景色をすごい大画面で見ると実際に見るのとは同じかと言え、やはり違うのです。というの、簡単に言えば、我々が最終的に空間を共有して共同をするということが一番の労働の本質なのです。それを共有できない場合に、例えばテレビで良い景色のところを見るときさまさまな形で補助はできるのですが、それ自体が空間にとつて変わることはできない。例えば赤ん坊が生まれたとして、ズームで赤ん坊と接触しているということ、果たして良いのでしょうか。やっぱり抱っこをしてスキンシップをするというのは当たり前のことです。それと、同じことが実は観光についても言えます。最終目的というのはその実物・実在の空間を体験する。それに至るプロセスとして様々なバーチャルな手段が活用できます。「バーチャル・ツーリズム」はその意味であくまで補助的な手段にとどまります。

というようにすることで、観光は労働と本質的に同じ側面があることと、しかし、管理されているのか自由に行うのか、その差は決定的に大きいと言ったことをおわかりいただけたでしょうか。

(次号へつづく)

中辺路町の合併を検証

地域に目を向けた 予算や対応を考えてほしい



左奥から、前さん、尾崎さん、高田さん、尾中さん、野上さん
左手前から杉谷、柳田、久保

本宮、龍神に続いて、田辺市との合併検証懇談会。今回は4月19日中辺路町で行いました。民泊を営む前さんに声をかけていただいて、尾崎さん、高田さん、尾中さん、野上さんと5名が集まっていた。研究所からは杉谷副理事長、柳田理事、会員の久保田辺市議、大前事務局長の4名が参加しました。

合併してどう変わったか

前：皆さん合併して、丸17年、18年来るけど、どういう感想ですか。

高田：良かった悪かったかと言われたらなあ。とにかく田辺市については合併したさかい、そ

れを是としていかな。自治体と住民は、小さい方が声も届くというか、思いが反映されるから良いと思うけど、今更、分市もできないし。今、自治体に何か期待するというのは、変な言い方だけど不幸や。自分らで考えてやっていかんと。

大前：今の中辺路の現状で、こんなにしたらということをお話し合うことも大事だと思うのです。本宮へ行ったら農地が荒廃して、何とかならないか、他の自治体で頑張っているところはないというような話が出たりしました。

高田：自治体問題研究所の方から、合併しない町とか和歌山やと北山村、どうしているとか情報を得たらとも思うけど、聞いても、恨み、愚痴になってしまふ。市長も小規模多機能自治体とか言っているけど、具体的にどういうのか分かりにくい。各行政局へせめて1億円ずつ位、自由に使えるお金があったらな。合併前は中辺路でも39億とか42億とか使えたのに。龍神、本宮、中辺路、大塔で、この4町村もそれぞれ文化とか考え方も違うし、合併協議のときに、大塔、中辺路は似ていてゆったりして

いたけど。本宮とか龍神の人は弁もたつし。

柳田：本宮や龍神、中辺路、大塔というのは、やっぱりちよつと違うのかな。龍神や本宮の人と話すとき、人口が減って、町や村が寂れて、悲壮感を持って、何とかしないとけないという気持ち強い。中辺路や大塔はまだ田辺市に近いから違いがあるのかな。

尾崎：でもだいたい人口が減ったのところがう。

柳田：本宮では銀行で職員が2人おるけども、公金の入金以外、銀行の入出金は全部ATMしか使えないという。だから窓口で金の出し入れは一切しないとか、昼休みの時間帯は銀行が閉まっているとか。それから農協などでも、支所がどんどんなくなっていくから、金融でも非常に不便になってきたという話を本宮や龍神の方で聞かされたけども。

尾崎：それは近露でも一緒ですよ。だんだん大塔の方へ行ってしまうって、ここはATMだけになったのですね。職員とかパートの者が1人いるけど。

高田：それも午前中やしな。

野上：ATMは小銭が使えない、そんなのですよ。保険のこともなつたら鮎川まで行かなあかん。だから行政もそうならんようにしてもらいたいですよ。行政的にも中辺路時代やったら、職員さんも地域のために一生懸命や

つてくれたけど。何となく、田辺の方向にしているのと思うようなときもあって、この辺のことをどれだけケアしてもらえるのかという心配があります。

尾崎：合併して一番なくなったのが行事ですね。例えば秋の何ぞの祭とか、近露だけで盆に地域のソフトボール大会があったけど、そういうお金もかけてくれないから、ソフトボールやバレーボールは町の大会一つになった。農協も一緒に、JA共済で歌謡ショーとか招待があったのですよ。けれど、9つ合併してJA紀南になったら、もう歌謡ショーの招待もなくなる。行政もやっぱり地域へ目を向けてお金を落としてもらおう、みんなが喜ぶような祭をするなら、それに対して助成を出すとか、何とかしてほしいなあ。

杉谷：市町村合併が始まった頃、自治体労働組合は反対していた。なぜかと言うと、やっぱり地域が疲弊していく。根本的な問題は、少子高齢化と財政問題、お金の問題で国が合併を推進して県も一緒に推進してきたというのが経過だと。地域の将来の展望をどう持ち住民が関わっているかが課題だと思うのです。でも合併が進んで、自治体が広がることで、各地域の問題がいまいにされる。そのことを行政にも考えていただく運動や取り組みが必要だと思うのです。

地域の条件を考慮しない 「平等主義」が蔓延る

尾崎：龍神、本宮は観光業がまだあります。こちら何か仕事を持ってきてもらわないと、若い者が出ていって戻ってこない。やっぱ産業振興を考えてほしい。

柳田：それはやっぱり第一次産業。

尾崎：そう、農業やね。でも農業でご飯食べるのは大変ですね。柳田：林業はどのくらいやっている。

尾崎：林業は、昔の緑の雇用で来られている方が4、5人永住している。そこに小さい子どもがいる。だから小さい子どもがいる人は、みんな1ターンの人ばかりで、地元住人の子どもは少ないです。

柳田：みんな出ていった。尾崎：この国道付くのが、10年



熊野古道 (近露王子跡近く)

早かったらこんなに出て行かない。こっちで家建てて通勤範囲だったと思うけど、田辺の方への通勤が無理だったのだから。

柳田：学校は統廃合されたのですか。

前：合併したときは、3小学校2中学校やった。数は変わってないが、生徒数が減ってしまっただ。

野上：統廃合の噂はあるのですが、地域に残してほしいということが残っている。

前：合併したときに学校現場にいたけど、妙な平等主義があるのよ。僻地の学校は、通学距離もあってスクールバスを使っている。それで、学校行事や体育行事にスクールバスを使っている。ところが、合併後、スクールバスの利用回数を減らせと言ってきた。何故かと言うと、他

地区の学校はスクールバスを使っていない。でもそれは自転車です。通えるところやからできる。これは合併関係なしに、地域の事情やからスクールバスがあった。学校は結局その分、業者の観光バスを頼んで、保護者負担を増やさざるを得ないことがあった。高校もそう、市街の子は家から通うのに、田舎から高校へ通う子に補助するのは格差ができておかしいというわけ。それは格差と違う。そういう条件、負担を強いられる所に住んでいるから、それに対して補助するのは

あたり前。それで平等な経済負担で高校へ通える状況になる。田舎やから補助金を出すのはおかしい。そういう発想があるような気がする。田舎の生活ではいろんな不便な面がある。年寄りがこのコープへ買物に来る事一つ考えても、そういうのに何らかの公費を使うのはすごく消極的。それは、不平等やという発想がある。僻地やから補助するのは、街におる人らと比べて平等じゃないという発想がね。

柳田：高校へ行こうとすると田辺市とか上富田、通学と思うとそうなるけど。

前：今ははつきりした値段分かんないけど、実負担3万円幾らいるな。

柳田：そういった助成は全くない。

前：昔のまま、三分の一補助で、上限一万円。所得制限ありやからなあ。

移住希望はあるが、ネックは仕事

前：今、ここの保育所、5人位

かな、5、6年前は20人おったんやけど。移住したい人は、多いようやけど。来る人は仕事を持ったり、例えば民泊をするのやという人とか、子どもがいる人は少ないけどな、でも、仕事がないなあ。さつき言ったみたいに。

高田：前に居た人は、東京からのお客さんに、こま来てもらうのが気の毒やと行って白浜へ行つたけど、その人はワッペン屋をしてた。子ども3人いたけど、勤めるといっても仕事持っていないとできない。

前：移住で子ども連れて来てくれるのは、うれしいのやけど、気の毒なのは、ここで子育てして暮らせる条件ができるのかどうかですね。それが一番、だから二の足を踏む人も結構います。この前、紀伊民報で紹介された焼き鳥屋さん「よっしー」は去年こつちへ子どもを連れてきてくれてキッチンカーで「焼き鳥」をいろんな所で販売している。

高田：経験も何にもない、元会社員の人が、奥さんと2人でキッチンカーで出て行って、夕方保育園迎える頃になったら戻ってきます。

柳田：北山村なんかは、人口400人余りらしいけど、やっぱ仕事と、生活する場所、教育や医療、そういうのをセットで移住を進めている。学校や保育園は無料にするし、仕事は、夏

は後下り、それが無いときは、じゃばらの収穫や加工とか、村でいろいろ段取りをして、よそから1ターンの入ってきてもらう、村の政策としてやる。そんな取り組みがある程度の効果を生んでいる。

行政は地域毎の
きめ細かい対応をしてほしい

久保：多分ね、小さい自治体の方が金を回すことができるし、そんなに大きな金額にならないと思うよ。

高田：それこそ昔の中国の話で小国寡民で言うてよ、それはもう小さい方が、住民の声が反映される。

前：旧町の小さい行政区に対して、何をするのが一番有効なのか。田辺市が、細かく分析して手を打てばいいと思うけど。田辺市全体ですることであっても、ピンポイントで、中辺路には今これが必要だとか、これをする

と地域が活性化するという、分析と投資が要するような気がするけど。

久保：さつき高田さん言ったように1億円、行政局で使えるような予算を付けたら、地域の分析がきたりするけども、予算もないなかで具体化するとこまでいかな。行政の重点は、やっぱり大きいところ、旧田辺の方

にどうしても傾いてしまう。4



Aコープ紀南と古道歩きの里ちかつゆ

町村の方は声が届きにくい。
高田：声は届いているけど聞かないのではないかな。田辺の駅前、角のところへ新しい施設ができていくけど、そこから向こうはシャッター通りになっていく。
久保：今は大分改善したけども、言われるように田辺の中心市街地に、合併してから200億円位の金を使っている。国からの補助金が多いけども。

産業振興について

前：近野で一番忙しいのはシルバー人材センター。そこへ頼まないで生活できない人が多い。家の周りの草刈りに始まり、そ

んなことまでという事をしてもらっている。でも、本当にやる気があれば、それを産業として、田辺市が育成すれば、雇用も生まれ。住民の生活も助かる。独居老人の生活から、放置された山や畑など、環境問題も、そういう事に予算使えないのかという気がするわけ。シルバー人材センターへは組織として援助をしているが、やる気があるのなら、そういう企業を立ち上げたらええ。

高田：この近野振興会の山は、田辺の(株)中川という「木を切らない」林業会社。植えたり育てたりが専門の中川雅也氏が創った会社に30年間の使用貸借している。ウバメガシを植えているけど、例えば20年で伐採したら、中川さんが6取って近野振興会は4もらえる。

社会起業家の(株)ボーダレス・ジャパンの田口一成氏の本を読んだけど、アカデミーで2年勉強して、起業しようと思えば、1500万円支給し、戻さ

いでいい。ゆくゆくは1兆円儲けたいと、10億儲ける起業を1000作って実現させたい。そんな夢があると書いていて、実績残している。地域振興にソーシャル・ビジネスと組んでいく。この間、ヤマツブという山の地図アプリの人が、それは、田辺市のたなべ営業室がしているリポーンプロジェクトで委託した

観光もコロナで大変

関係で来たけれど、田舎へ来る人も、そういう田舎の課題を解決してやるという形で来てくれるらと思う。
久保：この前、その営業室が、全国のシテイプロモーションで表彰されたので、テレビに出ていた。

高田：外国の人らが来ていたときは、民泊とかそれは盛んでした。始めた人は、嘘かほんまか、1000万円の儲けと言う人もおったけどな。
前：民泊バブルと言われたからね、5、6年前は。

だけど、民泊はもうけても地域に還元されにくいところがある。地元の店を使ってくれたらいいのやけど、なかなかそうもいかん。それで、外国人が来なくなつてもう3年。今、田辺熊野ツリーズムビューローも危機やと思う。国道311号にある「古道歩きの里ちかつゆ」も一度潰れて、去年の8月に運営が代わって、再開が何度も延期になり、今日は聞いたらゴールデンウィークもオープンしない。このやっばり2、3年、近野の観光業はやっばり窮地やな。
大前：人口対策って今各自治体がお金を出してとかやっていいますが、やっばり産業対策というのが一番だと思うのです。特に

一次産業の対策が一番人口対策にはなる。ある自治体の課長が言っていました、サラリーマンに住んでもらっても、子どもが出て行ったらそれで終わりやけど、農業は土地があるから、ずっと居てくれる。人口減るのは仕方ないけれども、少しでも維持しようと思ったら農業対策をしないとイケない。
高田：今日も朝のうちに田んぼを耕してきたけど、口に入るものをつくってれば間違いない。この間、中川君来たときに、これからは農業しとかなあかんと、40%切った自給率で、食料入ってこないようなことになったら、企業もそういうことを考えなくてはと言つてよ。

尾崎：田んぼを5反以上作っている人はほとんどいない。
前：元々、近野には、生活できるだけの農地がない。
久保：田辺で、そんなに数はないけども、若い人が野菜を中心にして生計を建てて、日置川の玉伝でやったりしている。その人らは連携をとり自分らで直販もするし、野菜で1年間やれるような仕組みにしたて結構儲かるような話も聞くのやけども。

移動の問題、「乗り合いタクシー」の実現を

久保：移動の問題が今後一番必要になってくると思うのです。

どこかへ出るにしても、車がなくてどうにもならない。近いうちに車に乗れない人がいっぱい出てくる。住民バスではカバーしきれない。その辺はどうですか。
尾中：地域の交通機関を守る。守ろうと思つたら利用しない。そういう状況ができていない。龍神バスがこら走っているけど、あれがないようになると、学校と同じような価値やと思う。公共交通がなくなつたら、なおさら他所に出て行くと思うし、誰も来なくなると思うわ。

柳田：近露やつたら、日に何本ぐらい走っているの。
尾中：日に4本ぐらい。観光の関係で、以前に比べ多くなつたように思うが。
尾崎：外国人が熊野古道を歩きた来た時は割とバスも乗っていた。それがコロナでさつぱりになった。いつ廃止されるかと心配しているところ。

高田：地元の人は夕方になつたらいなくなるけど、この通りが、外国人ばかりになる。宿泊客は旅館からぶらぶら出てきて、他所の国かと思うほどだった。そんな状況だったので、危機感がない。
久保：田辺市はね、年間、億の補助金をバス会社に出しています。

尾中：でも、旧田辺市内ほかの

地区は大方バスがなくなった。ここらも、これから一緒やと思

久保：さっき言った移動の問題では、僕ら乗合タクシーを実現したいと思ってる。今、バス停留所止まりというのを家まで来るようにしたい。

柳田：地域交通は、過疎地ではもう皆、問題になって、デマンド方式、注文して来てもらう。行きたいときに直ぐに行ける状況にしないと、結局、向こうに合わせてだったら便利が悪いわけ。でもそれは行政負担が重いから。

久保：新宮の熊野川町が乗合タクシーをやつて、上富田が来年4月から走らす検討をしている。ようやけど、この間、僕ら講師を呼んで学習会をやつて、やはりドアツードアでないと高齢者を移動することが出来ないという話だったので、今後は住民バスの代わりに乗合タクシーにならざるを得ないと思ってる。

森林環境税、地域の実情に応じた活用を

高田：市長は選挙当選したときに、小規模多機能自治というよ

うな仕組みやから、共通の課題の分は幾ら、それぞれ独自性は、別上げてこいと、身近な問題を解決するためにできないのかと思つてよ。

久保：議員させてもらつて思うのは、田辺市単独のお金を使うことは、極力嫌うのですよ、国の補助金は必死に取りに行つて使う。さっき言った旧市街地の200億円。ほとんど国からの補助事業で出たやつで、住民の要求で何かするのと違い、国の基準に合わせるから、住民は駅前にあんなにお金かけて、皆さんが望んだかと言つと、そうでもないと思うのです。要求に応じたまちづくりでは、お金は生きてくると思うけど、国の基準では、結果としてあまり喜ん

ないように思う。田辺市単独で、行政局に1億円という、そういう発想が全然ないですね。

高田：それと、中辺路や龍神、大塔でも、過疎対策事業とかあったと思うけど、国の役人も賢いから、現状に合った制度を作つていこうと思う。それをうまく活用したらと思うけど。山村対策係は、悲しいかな機能してないのと違うか、中心部の振興や、東京へ行つて何かするということ

でなく、山村とかを、生かすということを取り組んでほしいわな。

久保：森林環境税、田辺市は何億円も毎年下りてきて、本来、森林の管理に使うのですが、ま

だそこまで進んでないので、学校の机とか床、壁の集成材などに金を使っている。山の持ち主の手に使えらるる。近野の森林振興に、これだけのお金が使えらるるという形になると思う。

高田：それはしてくれ。この間から調査して、それで檜山を頼んで切り捨て間伐してもらつたのだけど、その金も計画も森林組合だけしか入つてないと、自力でしている山長とか、中川さんには入らんと聞くから、も

と、色々なアイデアも入れて、事業が100なら50は森林組合、50は民間の人らという形にするとかもいると思うけど。

久保：できるだけ生きた金で地元

に落ちるような格好の事業にしていくことやと思うので。尾崎：最後にもう1つ。鳥獣被害が酷いのですよ。せつかくお

ばちゃんがつつてもシカに食われてしまう。全てネットしないと農業ができない。シカやサルを捕つたら報償金でなしに、市で捕獲チームをつくつて鳥獣を退治する。手伝えと言つたら手伝いますので、そうしてもらえたらという要望を市に伝えてもらいたらと思ひます。

久保：その話は、市へちゃんと伝えます。

柳田：今日は出た話は、本宮や龍神でも共通する事が多かったように思ひます。各地それぞれ

ではうまくいかんから、みんな

で寄つて、共通の形のやつを市へぶつけていくようなことをせんと、なかなか運動になりたく

いと思ひるので、そんな機会が持てたら良いと、合併したところで、僕らも充分勉強できてない

けども、先進地みたいなのが

あつて、例えば旧村単位に行政局である程度の予算が配られて、それをその中で消化できる、自由に使えらるるという、そういう制度をつくりこんできた。それも合併する前から準備をしていたという経緯があるので、今からは難しいかもしれないけれど、そういうところがあつて、それを中辺路、本宮、大塔、龍神と、その地域の要求にこえられるよ

お知らせ

研究所会費納入について、3か月毎に請求書を送付していますが、今年1月から郵便局振り込みの場合にも新たに手数料(110円)が必要となりました。改めて、会費の納入についてお知らせします。

尚、会費は1年分、半年分とまとめた納入でも結構ですのでよろしくお願ひします。

会費の納入方法と手数料(請求書に記載)

- 銀行振込 労働金庫の通帳口座からATMを利用する場合無料、労働金庫ATMから現金の場合330円。
- 郵便局振り込み 同封の取扱書を使用して、郵便局の通帳口座からATMを利用する場合無料。郵便局で現金で振り込む場合110円必要です。